



# 館長だより

山形県産業科学館

令和7年12月23日(水)

発行 館長 加藤智一

## 西洋人から見たアジア人に対するステレオタイプ



ミスフィンランドの女性が、つり目写真をSNSに投稿し、フィンランド首相がアジア人への差別行為だとして謝罪したというニュースが、先日報道されました。外国人から見ると、アジア人は、目が吊り上がって見えるのでしょうか？全くピンとこない私は、周囲の人達に聞いてみたの

ですが、皆一様に理解不能。そこで、これはきっと生物学的特徴ではなく、西洋人が実際の顔立ちを正確に観察した結果というより、長年の西洋文化に根付いたステレオタイプによるものではないかという思いに至ったわけです。実際、西洋では19～20世紀にかけてアジア人を揶揄するために、目を細めたり、つり上げるジェスチャーが広まったことがあったそうです。これは実際にそう見えるからではなく、象徴するものとして作られた表現です。つまり、「アジア人=つり目」というイメージは、文化的に作られた偏見であり、現実の顔の多様性を全く反映していません。そもそもアジアと一口に言っても、東アジア・東南アジア・南アジア・中央アジアなど、顔の特徴は地域ごとに大きく異なります。目が大きい人、小さい人、二重、奥二重、一重、目尻が上がっている人、下がっている人、水平な人、どれも普通に存在します。「アジア人はつり目」というのは、現実の多様性を無視した単純化されたイメージなのです。

ではなぜ、西洋では「つり目」がアジア人の象徴になったのでしょうか？一つの理由として、歴史的背景があります。19世紀以降、アジア人を「異質な存在」として描くために、漫画、広告、映画などで繰り返し、誇張された目の表現が使われました。このことがステレオタイプとして定着したようなのです。そのため、現代でも「つり目ジェスチャー」は、

アジア人差別の象徴として認識されてしまいました。

さらに、ステレオタイプが消えずに残っている理由は、植民地主義が作った「見た目の分類」が長く影響していると考えられます。19～20世紀の欧米では、「自分たち=標準」「他者=異質」という世界観が強く、アジア人の特徴を誇張して描くことで「違い」を強調したと考えられます。細い目、黄色い肌、無表情、無個性、こうした表現は、当時の漫画・広告・教育・政治プロパガンダで繰り返され、残念なことに、文化の深層に沈殿したまま現代まで残っているという訳です。

この問題は、決して西洋対アジアといった単純な話ではありません。顧みれば、私たち日本人も他国の人に対してステレオタイプ的思い込みを持っていないでしょうか。ステレオタイプは、「複雑な現実を単純化したい」という人間の心理から生まれるとも言われています。ですからせめて、「アジア人という巨大な集団を一つの特徴で語らない」とか、「日本人は〇〇だ」とかいう言い方を避けるなど、個人の違いを意識する小さな習慣が、偏見を弱める最も効果的な方法なのではないでしょうか。日本では軽い冗談のつもりでも、欧米では歴史的に侮辱の象徴になる場合もありますし、アジア系移民にとっては痛みの記憶となっている行為もあります。こうした「文化間の意味のズレ」を理解することが、国際社会での誤解を減らすことに繋がると思うのですが（極めて正論）。

